



紀伊山地の霊場と参詣道 高野山が世界遺産に

JH3GAH 後藤太栄 高野山世界遺産登録委員会委員長

住民が一体となった登録運動

「高野山を世界遺産に」をスローガンに掲げ、山内の住民が一体となった市民団体、高野山世界遺産登録委員会が活動を始めたのは平成七(1995)年のことであった。以来、ユネスコ世界遺産センターの前所長、バーン・フォン・ドロステ氏を顧問に迎え、その指導のもとで実地調査やセミナーを重ね、私たちは高野山の文化遺産、自然遺産の普遍的価値を、あらためて見直したものである。

運動の熱意が国や県に伝わったのか、平成15(2003)年1月、熊野(和歌山県・三重県)、吉野山(奈良県)などとともに高野山は日本政府からユネスコ世界遺産センターに「紀伊山地の霊場と参詣道」のコア・ゾーン(核となるエリア)のひとつとして世界遺産リスト(一覧表)にノミネート(推薦)された。

多くの国々では、市民団体が主となって世界遺産の推薦に関わる。しかし日本では、これは国事行為とみなされ、国や都道府県の同意なしには一步の前進もない。事実、私たちの運動もこの壁に戸惑った時期もある。同じアジアであっても、国が主体となって世界遺産のノミネートを行うのは、日本のほかには中国、北朝鮮くらいである。日本が世界に約二十年遅れて世界遺産条約を批准して間もない平成4(1992)年ごろ、文化庁筋から世界遺産リストへの登録について関係者に打診あったと耳にしたことがある。

当時、関係者は世界遺産にまったく興味を示さず、丁重に辞退したとも聞く。もしこの時、高野山が世界遺産になっていれば…と今になって残念に思うのは私だけではあるまい。

高野山における世界遺産登録への機運の高まりは、竹村健氏が山内での講演で登録を強く提唱し、県知事をはじめ関係者に働きかけた平成7年(1995)

まで待たねばならなかった。

遺産ではなく世界の「至宝」

私は常々“World Heritage”を世界遺産とするのは意識ではないかと感じている。というもある時、ある住職に「遺産とはなにごとだ!お大師さんは今日もお山に生きておられるのだ」と指摘されたからである。

確かに言葉尻をとらえればそうだし、世界遺産の登録基準にも「生き続けている伝統」という項目がある。まして“遺産”と訳された“Heritage”は、聖なる宝、至宝などという意味で、それが転じて相続財産、伝統、遺伝などの意味に使われるようになった言葉である。したがって、親から相続する遺産とは本質的にその持つ意味が違い、この場合は“Inheritance”や“Legacy”が使われる。

条約の原本をひもどくまでもなく、世界遺産の理念を正確に理解すればそれはいわゆる“遺産”ではなく世界や人類の“至宝”と解釈すべきであることは一目瞭然である。

遺産にまつわる誤解

すでに世界遺産に登録されている五箇山(富山県)を数年前に訪ねた。登録申請の準備を担当した村の教育委員会によると、登録の際に舗装路を石畳にし、郵便ポストを昔の形状のものに戻すなど、さまざまな整備を行ったらしい。

しかし世界遺産委員会の調査委員たちは、そんなことには目もくれず、思いもよらなかったことに着目したという。

それは普沼、相倉集落に残る「結」という風習である。結とは、十数年ごとに茅葺き屋根を葺き替える普請のことで、村びとが総出で助け合う相互扶助の風習である。

私たちは、世界遺産リストへの登録について、国宝や重要文化財の数や、建物の伝統的なセッティ

ングについて目を奪われがちだが、条約の目的に照らせば、モノと精神が共に息づいている地域を保存していくことが世界遺産の目的であることを再認識したいものである。

なぜならば、理念がなければモノとしての遺産(至宝)は残らない。またその逆に、モノが残っていなければ伝統・風習・習慣もいずれ消え去ってしまい、結果としてモノもなくなってしまふ。

地域の文化を支える理念が、その土地の風習であっても、経済であっても、あるいは宗教や信仰であっても、世界遺産条約の目的は達成されるのである。

カルチャー・ツーリズムの胎動

高野山世界遺産登録委員会の活動に対し「観光客の増加を目論んでの活動は不純ではないか」、との指摘を受けたことがある。その疑問に対するドロステ氏の答えは実に明快だった。

……第二次大戦中、兵士を除いて地球上を人間はほとんど移動することはなかった。人々が地球上を活発に移動するということは平和の証である。世界遺産を訪れる人々が増えることは教育・文化を通して平和を実現するというユネスコの理念と完全に一致する。カルチャー・ツーリズムという概念はここから生まれたのだ…… 観光と遺産の保護は決して矛盾しないし、してはならない。それにははっきりとした理由がある。ユネスコ世界遺産委員会は、登録サイトを保護するための独自予算を持っていないからである。

世界中の登録サイトの中には過剰な観光化の進展によって荒廃が進んだり、経済的に維持管理が叶わず朽ち果てたものもある。

一方、インドのタージ・マハールでは、外国人の入場料金を百倍近く引き上げ、その収入で酸性雨による大理石の腐食を防ぐ工事を行っている。十戒の地、エジプトのシナイ山では、政府がケーブルカーとカジノの建設を計画し、物議をかもしている。

また、南米のマチュピチュでも、観光用のケーブルカーを設置し、その観光収入で遺産を設置しようと目論んでいる。

いずれの事例も賛否両論はあるが、その維持の方法について条約は詳細に拘束していない。むしろこの場合は、その地域に住む人々が最善の方法を見つけ出すよう促すのが、条約の目的なのだ積極的に理解すべきであろう。

そのためには、世界遺産というブランドを手に入れて満足するのではなく、条約の理念と目的を地域ぐるみで学習し、理解することが非常に重要である。わが祖山が目指す世界遺産登録の出発点もそこにある。それは「世界遺産の高野山」ではなく「高野山は世界遺産でもある」という気概と実践であるともいえよう。

そして条約の理念を包含しつつ発展し、国際社会の一員として存在していく姿勢こそが、今後の高野山のあるべき姿であると確信している。

(高野町長・高野山西禅院副住職)



The worldwide YL meeting 2004 in Seoul, Korea



The worldwide YL meeting 2004 in Seoul, Korea への思い

JR3MVF 三好京子

快晴のソウルで13ヶ国、約180名のアマチュア無線家が集まりました。1993年に大阪国際交流センターで第2回の国際YLミーティングを開催して以来12年目のことでした。

その間2~3年毎に違った国で開催され、再びアジアの地で開かれたことは、私にとっては一つの区切りがついたような思いです。どうしても欧米が中心になるこの種のイベントにアジアの、特にYLの参加が少ないことに気がついていました。そういう思いで名付けた1993年のアジアYLミーティングだったのです。韓国のYLとも大阪での出会いが最初でしたし、彼女達も国際舞台に大挙して参加するのは、初めてのようでした。その時とても喜んでいつか韓国でもこのような催しを聞きたい!と言いました。その時は是非バックアップして欲しい!約束してね!と話してきました。あれから12年後に若さ溢れる素晴らしい催しを開き、世界中からの参加者に韓国の歴史やハム事情をしっかりとアピールしたように思います。12年前に快くお世話くださった大阪国際交流センターラジオクラブの多くのメンバーが、一回り大きくなったこのYLミーティングに参加していただいたことは、とてもうれしい事でした。

毎回いろいろな事が起こりますが、全てのものを飲み込んでこれからもこのミーティングは継続していくことでしょう。次回は2006年にインドのムンバイで開催される予定です。最初にストックホルムでこの会を催したSMOHNV (Raija) より、"We are pleased in Sweden, that after our meeting, international meetings became a tradition. Thank you very much for all!" というメールが私のところに送られてきました。



コミッティ代表のHL1KDWとJA3AA



CW ペディションでアクティヴなDL3KWR



JE3BEQ,HL1MSE,HL1ALE,HL1DK



2006年の主催者VU2SWSとJA3UB



開催の協力者JR3MVFへ記念に水晶が

ウエルカム



たまたまバースデーの3人

WW YL Meeting 2004 in Seoul

に参加して

J43AER 荒川泰蔵

2004年10月8日から12日まで、韓国ソウル市で開かれたWorld Wide YL Meeting 2004に参加するため、国際交流センターラジオクラブのメンバーや会友（JA3AA 島さん、JA3AOP 杉山さん、JA4HCK 馬場さん、JA3BKM 松岡さんご夫妻、JL3APM 中村さんご夫妻）と共に、10月8日の午後Korean Airlineの724便で関西国際空港を飛び立ちました。先発隊は前日に出かけていたものの、初めてのIncheon空港からソウル市内のホテルまでの交通を心配していました。しかし、空港にはDS1JDM、Leeさんが出迎えに来てくれており一安心、DS1PLCなど6KODAのメンバー達が手分けして車でホテルまで送ってくれました。途中、高速道路の料金所の大きな電光掲示板には「Welcome to Seoul 2004 World Wide YL Meeting in Seoul Korea」の文字が見えるではありませんか！その歓迎を受けて一行は無事会場であるホテルにチェックインしました。周到に準備されたこのYL Meetingはスケジュールに沿って進められましたが、その背後にはJA3UB、JR3MVF三好さんご夫妻のバックアップがあったものと思います。開会式では主催者を代表してHL1KDW、ChaeさんからJR3MVF三好さんに感謝のトロフィーが特別に贈呈されたことで、その努力が参加者全員に紹介されました。

Meetingの全容は三好さんのメイン記事をご覧くださいことにしますが、私にとって韓国での初めてのQRVは、特設局DT04YLをゲストオペさせて頂くことで達成しました。10月9日の朝、ラジオクラブのメンバーがロールコールにチェックインしようと、特設局のシャックに集まりました。時間より早く14.160MHzをワッチしますと既に誰かが使用しており、コントローラーのJA3USA 島さんが見つめてくればよいがと思いつつ5KHzほど上でJA局と交信を始めたのですが、プログラムの開始時間が近づくと皆さん私を残してシャックを出て行きました。何とか島本さんとコンタクトしたかったのですがロールコールの時間になっても聞えず、毎週チェックインしている常連の多くはMeetingに参加していませんでしたので、残念ながらラジオクラブのメンバーとのQSOはできませんでした。

今回のMeetingを記念してスタンプを発行すると聞いていたので、郵趣クラブのJA4HCK 馬場さんと共に期待していました。10月9日の開会式の受付で馬場さんがその郵便切手を見つけてきました。日本で言う「写真付き切手」ですが、写真の部分にMeetingのシンボルを印刷したものです。かなり大きなイベントでも郵政当局に記念切手を発行させるのは容易ではありませんが、これならお金を払えば誰でも出来るグッドアイデアです。土曜日でローカルの郵便局は閉まっていると聞き、馬場さんと一緒にタクシーに乗ってソウル中央郵便局に出かけました。それはこの記念切手に開会日当日の消印をもらって記念品とするためですが、他にMeeting関係者は誰も郵便局に来ていませんでしたから、馬場さんと私が作った消印付きのカバー（封筒）は希少価値が出ることでしょう。

最後に、私にとってラッキーだったことは、晩餐会



ソウルでのYLミーティングに参加したJ13ZAGのメンバー

が私の誕生日である10月11日に開かれたことです。大きなバースデーケーキのローソクの火を他2人のYLと一緒に吹き消して、ケーキにナイフを入れさせて頂きました（このケーキは食後に各テーブルに配られました）。そしてシャンペンで乾杯をして、世界からの参加した皆さんに私たちの誕生日を祝って頂きました。



JE3BEQ 宮本さんご夫妻



JA3PYG 山本さんご夫妻



JR3MVF・JA3UB 三好さんご夫妻



JH3CIB・JA3BOA 乾さんご夫妻



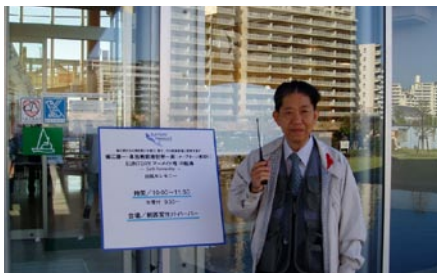
堀江謙一さんの サントリーマーメイド号 出航

JA3AER 荒川泰蔵

「東回り単独無寄港世界一周」に挑戦される、堀江謙一さんのサントリーマーメイド号は、台風が過ぎた晴天の下、予定通り10月1日午前10時からの出航セレモニーの後、新西宮ヨットハーバーを無事出航されました。ヨットハーバーからはJA3DO 塩崎さん、JA3AOP 杉山さん、JA3GMI 竹原さんたちと見送らせて頂きました。

出航後幸運にもJA3FAT 野村さんのヨットに乗せてもらって1時間余り伴走しながら再度見送らせて頂くことになりましたが、正午ごろ21MHzにQRVされたJR3JJE/MM 堀江さんとQSOすることが出来ました。

今回の航海では特にスケジュールを組まず、船舶局向けのオケラネットやシーガルネットにチェックインするほか、偶然の出会いを楽しみたいとのことでした。尚、堀江さんの航海の状況は<http://www.suntory-mermaid.com/> で見る事ができます。



世界女性アマチュア無線家の 集い in Seoul のあれこれ

JA3UB 三好二郎

1991年にストックホルムで産声をあげた「世界女性アマチュア無線家の集い」はその後、1993年大阪国際交流センターでのアジアYLミーティングで形がつくれ数年間隔でベルリン、スバルパード、ハミルトン、パレルモで開催された。大阪での集いに参加した韓国の女性ハム達がいつの日か、きっと自分達も韓国でも開催すると言っていた。その約束が実って、開催の日がやってきたのだ。

仁川空港に降り立ち、出迎えのボランティアの車に乗せてもらって市内へ向かう高速道路の電光案内板にWell come to Seoul. 2004. The world wide YL meeting in Seoul. Korea と表示されているのを見て、ついにやったなあという思いが込み上げた。



会場へ到着しチェアパーソンのチャエと挨拶の頬ずりをしたとたん彼女の涙が頬を伝った。

白鳥は水面上では悠然と泳いでいるように見えるが水面下では必死で水かきをパタパタさせていると聞いたことがある。彼女の万感の思いがひしひしと伝わってきた。

この行事の表通りの記事は別の方々に任せ、形に表れなかった、あれこれを記述したいと思う。そもそもこのようなミーティングは「気の合う者が集まって楽しくひと時を過ごそう」というものなのである。基本的には主催者とか参加者の区別なく、お互いが助け合って開催し、主催者側はホストとして世話役をしてくださるボランティアなのである。そのことを参加者は本来認識している筈である。今回もごく一部の人であるが、お世話役の人達を旅行会社やホテルのスタッフ、会社の社員と勘違いして筋違いな苦情や自己のこのみでの考えで評論を述べたり、団体行動のルールを逸脱したりしてひんしゅくをかっていたのは残念なことであった。参加申し込みして到着便の連絡までしていながら、キャンセルの確認をしていない人があり、ボランティアで空港まで出迎えに行った人に迷惑をかけた事例もあった。イベントは参加者が多いほうが盛り上がりやすいのだが、ごく一部の非常識な人達には参加資格がないと断言したい。我々の仲間にはそん

な人はいないので、胸を張って楽しく参加させていただいた。外国の人には誤解されないように「この人は友人、あの人は知り合いであるが友人ではない」と区別して紹介することにした。

くどくどとぼやいたが、イベントは実にすばらしいもので多くの参加者は絶賛していた。

世界各地から集まった老若善女と付き添いの男共は、長い年月をかけてノウハウを蓄え、準備し献身的に御世話をしてくれたコミッティのHL1KDWはじめYLハムの皆さんと、それを支えてくださった方々のおかげで、煩惱から解放されて楽しいひと時を共有することができたのである。

最終日のパーティの終了時に、世話役の皆さんの目が潤んでいた。

ボク目からも汗が出てしまったのも熱気のせいばかりではなかったようだ。

殆どの参加者が別れ際に、そして帰国後にE-mailやEcholinkそして無線の交信などで、素敵なミーティングであったと・・・。特に当初色々な事情から参加することを躊躇していたヨーロッパの人達が「本当に来てよかった」と言ってくれたのは嬉しかった。

このように多くの人達に楽しい機会と感動を与えてくれた韓国女性ハムとその御家族や多くの御世話役の皆さん、コマブスムニダ&ありがとう!



大阪国際交流センターラジオクラブ

JI3ZAG

Web: <http://ja3.net/ihouse>

Newsletter

http://www.ja3.net/ji3zag_nli
会報を自由にダウンロードすることができます

ロールコール

毎週土曜日 9:00JST@14.160MHz

月例会

大阪国際交流センター
毎月第2金曜日